



統合失調症早期介入の意義と実際

コーディネーター 水野 雅文

近年精神障害、特に統合失調症に対する早期発見や早期治療、あるいは早期介入と呼ばれる領域に対し関心が高まっている。本学会の特別講演で招聘されたメルボルン大学の Patrick McGorry 教授が先導する早期介入研究は、手堅い実践モデルを育てながら豪州から瞬く間に英国や北欧、さらに米国に広がり、国際早期精神病協会 (International Early Psychosis Association) の発展や Early Intervention in Psychiatry 誌の創刊に見られるように、統合失調症の病因や発症メカニズムにかかわる生物学的研究面からの関心と、精神保健あるいは予防精神医学の発症頓挫への夢をも巻き込みながら発展を続けている。

早期発見・早期治療という古くから気付かれながらも精神医学においては遠巻きにされてきた臨床の鍵概念に対して、欧米を中心に実践や議論が昂じてきている背景には、1950年代からの脱施設化による入院治療から地域ケアへのサービスシステムの移行が強く影響している。脱施設化の後の地域ケアを煎じ詰めれば、長期入院による慢性例のリハビリテーションの重要性は認識しつつも、次には疾患の進展をより軽症にとどめ、未来の慢性例を生じないことに治療的エネルギーが傾注されるのは当然の流れである。精神科サービスのあり方においてわが国と類似点も多いアジア諸

国においても早期介入への関心は高く、すでに香港、シンガポール、韓国などを中心に早期介入研究の輪 (Asian Network for Early Psychosis: ANEP) が拡がり、共通するアンチスティグマなどの課題に知恵を出し合っている。

こうした動きに乗り遅れてはこれまで脱施設化で大きな遅れをとってきたわが国の精神科サービスは、地域ケアの基盤整備において躓くことになってしまう。

本シンポジウムでは、まず「早期介入の意義」について特に DUP (精神病未治療期間) の意義とその短縮による転帰改善の可能性、そのための方略について慶應義塾大学医学部精神神経科学教室の山澤涼子氏、早期介入に欠かせない普及啓発を含めた精神保健活動の重要性と諸外国における実情、さらに津市において得られたデータの紹介などを「早期の相談・支援・治療につなげるための啓発活動——諸外国の現状と戦略——」として東京都精神医学総合研究所の西田淳志氏に、前駆期に関する生物学的研究のなかでも近年確実に新たな知見が増している神経画像研究の立場から「統合失調症前駆期における脳画像診断」について富山大学大学院医学薬学研究部神経精神医学の川崎康弘氏に、早期診断の方法論について構造化面接やスクリーニングテストの開発を含めて「前

駆状態のアセスメント——症候学的観点から——」について、東京武蔵野病院の小林啓之氏、精神科医一般が早期精神病に対してどのような認識を持って治療に当たっているかを調べた東邦大学医学部精神神経医学講座の辻野尚久氏に「統合失調症の前駆期に対する精神科医の治療観」について、また治療の観点からは「精神病発症危険群への治療的介入：SAFE ところのリスク外来の試み」として大学病院で専門外来を開設し認知行動療法を取り入れている東北大学病院精神科の松本和紀氏、前駆期症例や初回エピソード統合失調症の若者に限定した急性期デイケアで早期精神病

治療に取り組んでいる東邦大学医学部精神神経医学講座の武士清昭氏に「精神科急性期デイケア：イルボスコにおける試み」について講演をお願いした。

各演題発表の持ち時間が短くなってしまったが、現在のわが国における早期介入の現状を網羅的に把握できる構成となり、今後の課題と問題点を検討する上で非常に有意義なシンポジウムとなった。共同司会の都立松沢病院岡崎祐士院長がわが国においても地域に根ざした早期介入チームの設置を含め、多様なサービスの展開を目指していく必要があると指摘され締めくくった。